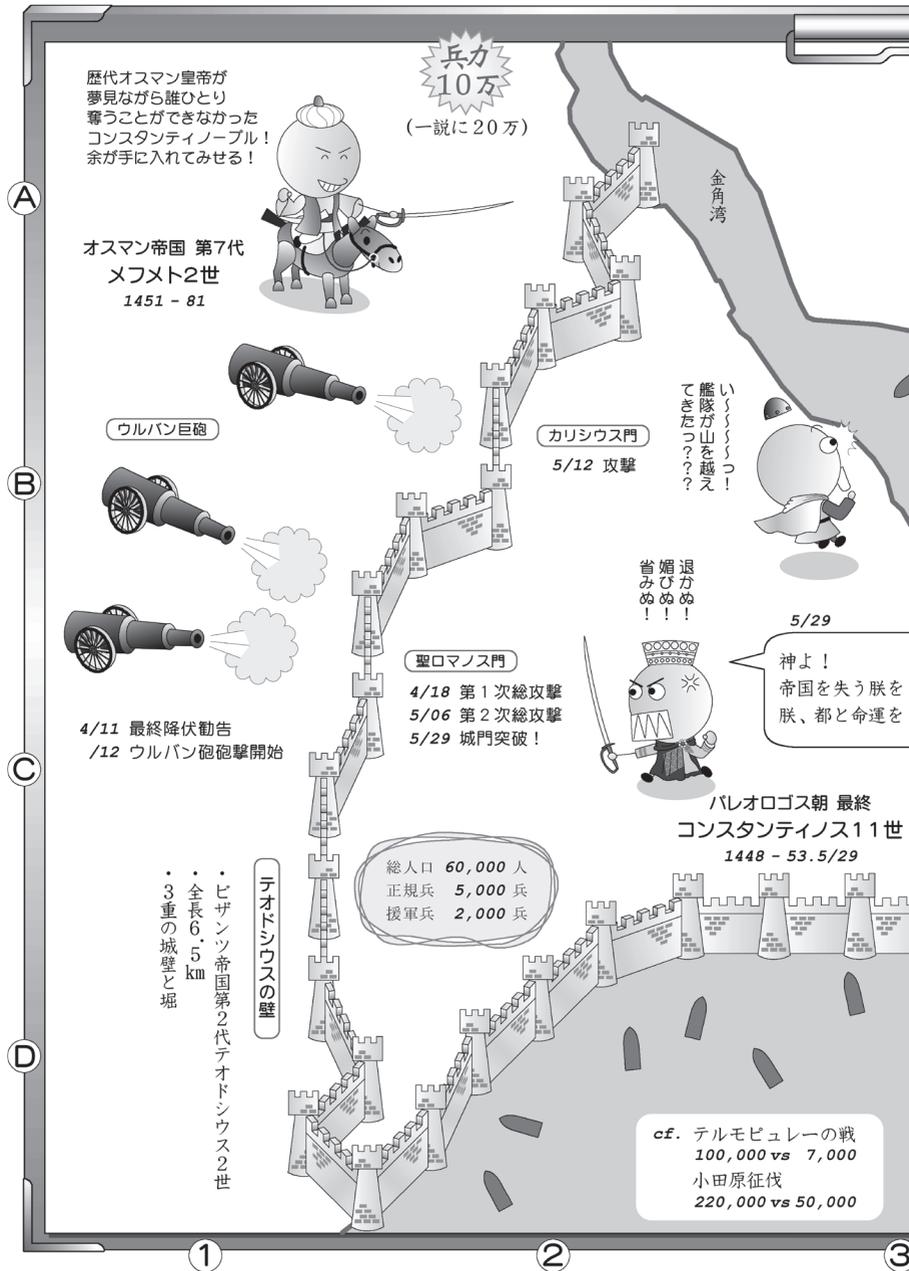
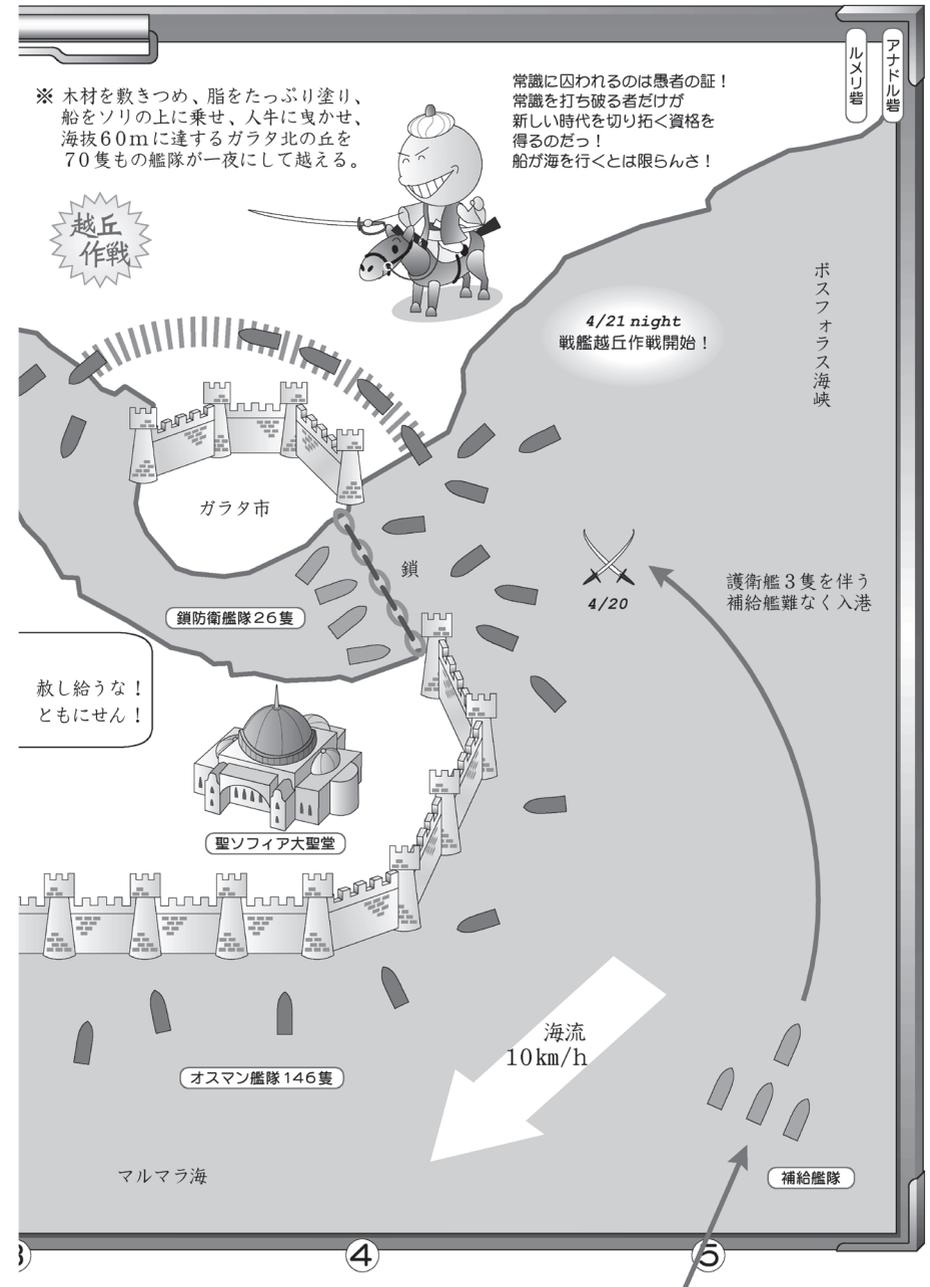


〈コンスタンティノープル落城〉



1453年



第1章 オスマン帝国の勃興  
第2章 オスマン帝国の隆盛  
第3章 サファヴィー朝ムガル帝国の勃興  
第4章 イスラーム三國志(興隆期)  
第5章 イスラーム三國志(絶頂期)

諸行無常。驕れる者は久しからず。猛き者も遂には亡びぬ。

古代ローマ帝国滅亡後、1000年にわたって東地中海に君臨してきたビザンツ帝国も、ついに「その時」を迎えます。

このときには、すでにコンスタンティノープルとその周辺を支配するだけの都市国家レベルまで落ちぶれ果ててはいましたが、なんとといってもコンスタンティノープルは「難攻不落」。

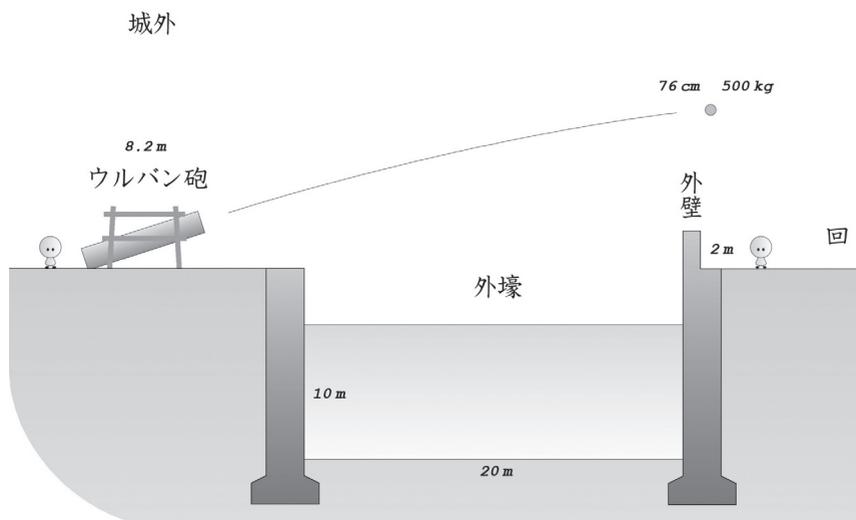
これまでも、歴代オスマン皇帝は何度も何度もこれを包囲、攻め立てましたが、すべてこれを跳ね返してきた大城塞です。

まずは、その「君府」<sup>コンスタンティノープル</sup> 全容を見ていきましょう。

パネル地図をご覧くださいでもわかりになりますように、「君府」<sup>コンスタンティノープル</sup> は、三角形に近いかたちをしていて、その東端あたりに、あの有名な「聖ソフィア大聖堂(C-4)」があります。

そして、

- その東端は、ボスフォラス海峡(A/B-5)に面し、
  - その北側は、金角湾(A/B-3)に面し、
  - その南側は、マルマラ海(D-2/3/4)に面しており、
- 三方を海に囲まれた、まさに“自然の要害”を成していました。



したがって、マルマラ海に面したところにも一応城壁は造りましたが、敵艦から上陸できない程度のものでよかったため、それほど強固なものとは必要とせず、<sup>ゴールデンホルン</sup>金角湾側に至っては、<sup>ゴールデンホルン</sup>金角湾の入口に「鎖(B/C-4)」を張っておくだけで、敵艦はここに侵入できないため、なにも莫大な資材を投じて強固な城壁を造る必要はなく、比較的小規模な城壁で充分でした。

それよりも、問題は西側です。

西側は開放状態ですので、ここから敵軍に侵入されては元も子もありません。

そこで、ビザンツ帝国の第2代テオドシウス2世が、前代未聞の強大な城壁を築きます。

それこそが、「テオドシウスの壁」(C/D-1)と呼ばれるものです。

この城壁の断面図を下に描いておきましたのでご参照ください。

図の右側が城内、左側が城外です。

